

考える人

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

“シンクタンク”（Think Tank）は、米国で生まれた研究機関を形容してつくられた言葉と言われる。その特徴は「中長期的な未来に関する戦略的な政策提言を行う非営利の独立機関」とされ、日本では“頭脳集団”とも訳される。

わが国にも、「地域シンクタンク」と呼ばれる経済研究所が結構ある。いずれも地方銀行や自治体などが母体となって設立されたものである（地図参照）。1960年代から、幾度かの研究所設立ブームを経て、最近では、市町村単位の比較的小さなエリアのシンクタンクの設立が相次ぐ。これは、地域主権に呼応する「地域のことは現場で考える」試みの表れである。

各地のシンクタンクでは、どのようなテーマが扱われているだろうか。当財団地域未来研究センターのホームページの「地域データ図書館」内には各地の研究レポートのタイトルを分類し紹介する『ご当地レポート』コーナーがある。現在、約40のシンクタンクの約900本が掲載され毎月追加している。産業調査から、環境、交通、観光、文化、生活スタイルに至るまで、地域特有の様々なテーマが研究されている。

生活スタイルには、住みやすいまちとは？ 子育てしやすいまちとは？ 安心安全なまちとは？ など、最も身近で大切な課題に挑戦している。産業調査では、攻めの農林水産業、地域性豊富なものづくり、世界に誇れる産品や中小企業の取組が具体的に紹介されている。また、地元食品スーパー、書店、冠婚葬祭業の動向など、日常生活に関するものも欠かせない。

自然エネルギーやエコライフなどの環境、プロスポーツや音楽などの文化ものも増えている。これらは、今後の地域経済の発展を考える上で、ますます重要なテーマであり登場回数が増えると思われる。

山形県のフィデア総合研究所（旧荘銀総合研究所）は、地元Jクラブのモンテディオ山形について継続して取り上げ、関わる人と人とのネットワークを広げて地域経済の波及効果を高めることを提案している。提案後も引き続き現場で活動をし続け、例えば、「観戦から観光へ」という提案に、クラブと温泉地と共同でPRチラシを作成したり、もてなし隊を結成したりして、日々具体的な実践方策が同時に考えられる。

しがぎん経済文化センターでは、音楽文化の創造についての考えが活発に議論される。コンサートの演奏家、聴衆、主催者がそれぞれの持ち味を発揮して三位一体で「音楽文化」を育てることを考えている。自ら会報をつくってその魅力を積極的に伝え、十年にも及ぶ活動は、今日のびわ湖ホールの建設につながった。

共立総合研究所（岐阜県大垣市）は、名古屋駅前のJRセントラルタワーズの誕生で、中心市街地の栄地区の地盤沈下を懸念して、効率や機能を優先する駅前地区に対し、ゆとりや遊びを大事にする栄地区を演出するよう提案した。5年後、10年後の姿を想定し、今打てる手を打っていくべきと、危機感を共有して行動に移っている。

単なる提案ではなく、現場で考えながら一緒に行動することは、現場のことを最も良く知る地域に根ざしたシンクタンクだからこそ可能なこと。地域との距離が身も心も近ければ近いほど、地元からの注目や期待も大きくなる。そこに一人の「考える人」が現れると、その周りには一緒に「動く人」が集まってくる。そして、現場は互いに呼応し合い、地域はひとりでは変わっていく。

地域の未来への歯車は、「考える人」から回り始める。

地域シンクタンク

() 内は母体行
数字は設立年



* (財)日本経済研究所にて作成。

* 当地図は、地域未来研究センター「地域データ図書館」のホームページにて拡大してご覧になれます。